

論文

朝鮮語教育における CALL の現状と課題

— 立命館大学の朝鮮語 CALL を中心に —

盧 載 玉・梁 貞 模

要 旨

近年、IT (ICT) 革命と言われ情報化社会が進むなかで、コンピュータテクノロジーはもはや語学教育、学習にとって欠かすことのできないメディアとなっている。日本でもすでに多くの語学教育の現場で CALL が導入されているが、本稿は、こうした教育環境をめぐる変化を背景に、朝鮮語 CALL の現状とその課題について検討、考察し、今後の朝鮮語 CALL の可能性を展望するものである。本論ではまず、言語習得に関する教授学的観点から CALL についての理論と研究動向を概観して、次の考察の足がかりを見つける。次に、盧による立命館大学の CALL 授業を例にして、朝鮮語 CALL の具体的な現状を提示しながら、その問題の所在を明らかにする。最後には、学習者における個人差、動機づけ、自律、そして学習過程の個別化などをカギ概念として、朝鮮語 CALL の理論枠組みの構築の可能性を模索する。

キーワード

朝鮮語、CALL、心的要因、学習スタイル、動機づけ、自律、学習過程の個別化

はじめに

IT (ICT) 革命と言われ情報化社会が進むなかで、教育活動を支えるメディアは今急速に進化している。外国語教育の現場においても、高度情報化社会への対応が緊急の課題となり、60年代の LL から、コンピュータを導入した CAI や CALL へと、語学教育の方法は大きく変化しつつある。特に、コンピュータは、教授—学習の環境でその重要性を益々増してきており、コンピュータテクノロジーはもはや単なる使用可能な道具ではなく、紙メディアや対面コミュニケーションと並んで、語学教育、学習にとって欠かすことのできないメディアとなっている¹⁾。今や CALL をめぐっては、新しい教授、学習のツールとしてコンピュータを使うべきかどうかというのではなく、どのようにコンピュータを使うべきかが問われる時代が変わってきている。

日本でもすでに CALL は多くの語学教育の現場で導入されていて、幾多の研究や実践報告により、外国語教育におけるその成果が注目されている。このような CALL システムの教育現場への導入にはさまざまな要因が関わっている。つまり、コンピュータテクノロジーの飛躍的進化やインターネットの爆発的な普及などの技術的進歩に加えて、国際化時代に合わせた外国語教育の改革を求める社会からの要請や、従来型授業から学習者中心の授業への語学教授・学習法の転換な

どを背景に、CALL の普及が急速に進められているのである²⁾。

それでは朝鮮語教育において CALL は必要なのか。もし必要であればそれはどのような CALL なのか。本稿は、立命館大学における朝鮮語 CALL の現状とその課題について検討し、朝鮮語 CALL の今後を展望する手掛かりを見つけることをねらいとする。

1. 外国語教育と CALL

1. 1. CALL とは何か

そもそも CALL とは何か。CALL とは Computer Assisted Language Learning の略で、「コンピュータの支援による言語学習」のことを意味する。この定義が示すように、CALL とは外国語教育学や第二言語習得理論とコンピュータテクノロジーとによって成り立つ語学教授、学習のことである。しかし、一言で CALL と言っても、コンピュータテクノロジーと外国語教育・学習との結びつきは実に多様である。一般に、外国語教授、学習におけるコンピュータの役割の観点から CALL は次のように分類される³⁾。

①チューターとしてのコンピュータ (Tutor role) - 行動主義的 CALL

1960-70 年代の行動主義心理学の刺激・反応図式に基づいた言語教授法の理論的枠組みに沿って、教科書で学んだ文法知識の理解を定着させるためドリルを繰り返す。基本的な指導パターンは、コンピュータによる問題の提示→学習者の反応→学習者の反応に対するフィードバック情報→学習者の反応で構成される。その際に、コンピュータは、学習者に対してドリル問題などの学習題材を提供し、答を判定するチューターとしての役割が当てられている。ドリル型の CAI 教材はその典型であるが、これによって学習の個別化と効率化を図ろうとした。

②ツールとしてのコンピュータ (Tool role) - コミュニカティブ CALL

学習における認知的な要素に着目して、学習者自らが選択し、コントロールし、相互作用を行うなど、コンピュータをツールとして利用するようになった。たとえば、コンテキストのある穴埋め問題やクローズ問題、文の並べ替え、テキスト再構成、ワープロソフト、文法やスペルチェッカーなどがこのモデルに属する。他に、目標言語とその文化に関する文字、音声、映像へアクセスできるインターネットやデータベースなどもリサーチのためのツールとして利用される。

③メディアとしてのコンピュータ (Medium role) - 統合的 CALL

1990 年代以降、コンピュータのマルチメディア化と並んで、コンピュータのネットワーク化とインターネットが普及され、ウェブサーチによるさまざまなタスクが可能になった。このことにより語学学習の質的転換がもたらされる。すなわち、従来型の授業から、リサーチや自己発見型、プロジェクト型学習など、学習者中心の授業が多く行われるようになった。コンピュータは単なる言語学習のツールとしての域を越えていき、グローバルなコミュニケーションのためのメディアとなった。それによって CALL もコンピュータと人間との相互作用において捉えられるようになった。

これらのモデルはそれぞれ問題点がある。チューターモデルに対しては、ドリルなど単なる反復による練習で、想像力に基づく学習活動の欠如が指摘された。その他にも、CALL における教師の役割の曖昧さや学習者同志の相互行為がないことが批判される。一方、ツールモデルやメ

ディアモデルでは、学習者中心の自由な学習ができる半面、学習成果の評価が困難になってくる。こうした問題を勘案すれば、実際に授業をデザインする際にはそれぞれのモデルの特徴を十分に把握しておく必要がある。たとえばチューターモデルは問題点が指摘されてはいるが、学習者が意識的に行う言語知識の習得やリスニング力、読解力、発音の訓練などではその効果が認められるのである⁴⁾。CALLの教材が一斉授業用なのか学習者の自習用なのか、目標はリスニング力の向上なのか読解力の育成なのか、学習者のレベルはどのくらいかなど、さまざまな要因を考慮し、それらに最も適したCALLの形態を選択して、その方法を組み立てていかなければならない。

さて、CALLは上記のような過程を経ながら進歩してきたが、さらにCALL研究における重点の変化にも言及しなければならない。欧米においてコンピュータの多様な機能が注目された90年代は、CALLは「言語教育と学習におけるコンピュータ利用に関する研究と調査」⁵⁾という観点から研究が進められている。つまり、情報環境におけるコンピュータの導入がもたらした論点となっていたが、現在ではCALLは、いかなる形であれコンピュータテクノロジーが関わるコンテキストにおいて学習者が言語を学ぶことと捉えられる⁶⁾。ここでの焦点は、コンピュータの利用にではなく、言語を学ぶ学習者の方に、そして結果としての言語習得の方に向けられている。次の主張にはこの点がいっそう明確に表れる。EgbertによればCALLは、学習者、言語、学習環境、学習ツール、タスク、学習プロセスに影響を及ぼす仲間と教師といった諸要因が統合されたものとして規定される⁷⁾。したがってコンピュータはさまざまな要因の中の一つに過ぎず、しかもこの定義においては、コンピュータという言葉すら用いられていない。将来的には、コンピュータは、教師と学生にとって利用できるメディアの一つとしてごく当たり前のもの(normalization)となり、CALLは、外国語教育のさまざまな可能性の一つとされ、CALLという語自体その新奇性を失い不要になることが予想されている。

目下のところ、欧米のCALLの研究は教育環境におけるコンピュータメディアの日常化へと進展しているが、日本での状況はどうだろうか。岩崎によれば、元来日本では、CALL教室のレイアウト自体から、コミュニケーションな授業や協調的な学習と親和性のある教室環境ではなかった⁸⁾。つまり、それは対面型授業や一人一台で使う個人作業のみを前提にし、学習者が一人で端末に向き合っているドリル型学習に重点が置かれすぎていた。これが対面講義型CALL教室での講義型授業とe-learning教材と称されるコースウェアを使ったドリル型個人学習に重点をおく、いわゆる「日本型CALL」である。

ところが近年、大学におけるCALLの設備は、外国語CALL教室でのCALLの授業から、オンライン上のコースウェアで学ぶことのできる自習設備や、インターネットに接続して学生が自由に外国語を学習することのできるマルチメディア自習室など、多岐にわたる。また実際の授業の具体例からすれば、CALLの形態は実に多様である。その主な例として吉田は、①ワープロ機能を利用したライティング練習、②ドリル型CAIの実践、③市販のマルチメディア教材の利用、④マルチメディアCALL教材の自作、⑤インターネットを利用したコミュニケーション、⑥DVDシステムを導入することにより、多様なメディアをデジタルに統合し、マルチメディア教材として利用、⑦上記の方法のいくつかとビデオカセットなどのメディアの組み合わせ、などをあげている⁹⁾。中でも、CAIドリルやマルチメディアCALLの練習、インターネット、LL練習などを組み合わせて行う方法は、対面授業との連動も可能で、実際の授業で活用しやすい。

実際に CALL を活用する際には、それが、どの分野で、どのような学習者にとって、どのような学習目的を目指して利用されるのか、その用途を区別する必要がある。そして単にメディアの種類や、教材、学習の形態の違いだけでなく、テクノロジーの機能と学習目標との間の適切性を確認する、つまり、言語教育、学習の観点からもその有効性を考慮し、最も適した方法を確立することが必要である。

1. 2. 語学教授、学習における CALL の効果

では、コンピュータがなくてはできない側面として特に重視される CALL の特徴は何か。それは以下のようにまとめられる。

(1) 学習の効率性

CALL では学習者は、言語知識やスキルをより早く、より少ない時間と労力で習得することができる。というのも、CALL では、学習課題の個別化を図ることで、学習者が自分の能力レベルに応じた教材を自分のペースに合わせて個別に学習目的を果たすといった個人学習形態を取ることが可能だからである。それにより CALL では、学習者のニーズや能力の違いに応じた多様な学習のあり方が可能かつ必要となる。

(2) 学習の効果

学習の個別化により、学習者は能力のレベルや学習のペースに合わせて言語知識やスキルを習得することができる。それにより従来型の受動的な学習形態から主体的な学習へと、学習の質的転換が起り、いっそう効果的な学習が期待される。また学習者によってはコンピュータとの相互作用の方を好む場合もあり、分からないところは繰り返し練習し理解することができるということも長所である。その他に、ネットを通じてグローバルなコミュニケーションを取ることや、文化的コンテクストの中でリアルな外国語を学ぶことができることも、CALL のメリットとして看過できない。

(3) アクセス

他の方法では入手困難な教材を手に入れたり、学生が相互作用を行ったりすることができる。またコンピュータを導入することで文字、音声、静止画と動画といった複数のメディアを有機的に連動させて扱うことができる。こうしたマルチメディア教材が提供する総合的学習環境やパソコンの操作といった学習活動の形態は、多様な学習者の関心・興味に対応でき、学習意欲の向上にもつながる。

(4) 便利さ

e-learning の教材やネットに接続さえすれば、時間と場所の制限を越えて、24 時間いつでもどこでも学習し練習することができる。また何度でも即座に聞きたい音や見たいシーンにダイレクトにアクセスできる点で時間のロスもなく、便利である。

(5) 動機づけ

CALL では学習者は、コンピュータの新奇性から言語学習のプロセスをより楽しみ、学習に没頭することができる。その際に学習者が自分の学習過程をコントロールしていく、いわゆる「自己調整学習」(Self-regulated learning)¹⁰⁾が行われるが、それによって学習者は自らの学習に対して高く動機づけられる。このような CALL の動機づけの側面は、自律した学習者になるために必要なスキルを習得させる上で、特に重要である。

1. 3. CALL の有効性の問題

CALL の実践はしばしば、情報機器の新しさや機能の多様性、マルチメディアの新奇性といった観点でのみ語られるが、CALL は第一義的には、外国語教育や外国語学習に関する課題であることに注意しなければならない。つまり、CALL とは、「学習者がコンピュータを使用し、その結果として彼／彼女の言語が上達する一連のプロセス」¹¹⁾であり、CALL の有効性は何よりも、外国語能力の習得にとってそれが効率的かつ有用であるかという点において検証されるべきである。

CALL の有効性は、学習の成果として学生の言語能力がどのように上達したかに関わっているが、実際に CALL の効果は検証することが困難である¹²⁾。なぜなら、コンピュータ利用と学習プロセスに影響を及ぼす他の諸要因とを切り離し、学習効果が主としてコンピュータ利用によるものであることを明らかにすることはできないためである。CALL 教育の成果を具体的に調査・検証することは必要であるが、有効な方法論の確立は今後のさらなる研究成果を待つしかない。

とはいえ、CALL の学習効果に関しては、すでにさまざまな研究、実践報告によってその有意義性が主張されている。その例として、CALL 授業の教育効果として、言語能力を評価するテストの得点上昇や、学習者の動機づけの改善といったものがあげられる。しかし注意すべきなのは、コンピュータの導入それ自体は CALL の有効性を保障するわけではないという点である。鏡によって指摘されるように、CALL の実践が堅固な学問的な背景に支えられたものは少なく、この方面での理論化の作業は遅れているといわねばならない¹³⁾。

まずコンピュータとは、言語取得に関するさまざまな教育理論や方法が実践に移されるための一つのメディアに過ぎない。しかもテクノロジーの使い方はさまざまであるため、テクノロジーそのものの有効性を一般化することは早計である。テクノロジーの導入によって学習タスクの効率性が高まったとしても、それが直ちに、指導の効果を意味するとは限らない。CALL の有効性は、単なるテクノロジーの導入・利用にではなく、それがどのように用いられるか、その使い方において求めるべきなのである¹⁴⁾。敷衍すれば CALL の有効性は、どのような学習者にとって、どのような形態でコンピュータを利用し、それが学習者にとって何を意味するのか、という観点から検証されねばならない。

竹蓋によれば外国語教育の現状とその問題を次のように捉える。つまり、まず、教師が外国語教育の「目的、目標」を具体的なものとして十分に理解していないこと、次には、学生のレベルの現状も必ずしも明確には捉えられていないこと、その結果として、適切な教材、指導法が開発、採用されていないのである¹⁵⁾。確かに、外国語教育を有意義にするためには、まず教育の進むべき方向を示す目的を明確に規定しなければならないことは言うまでもない¹⁶⁾。そうすると、CALL の有効性は、まずはコンピュータの利用が外国語教育の目的や目標、そしてそれに

沿って選ばれた授業内容や教授法にマッチしているかどうかによって、学習の成果として学習者個々の言語能力がどのように上達したかによって、その効果が検証されるのである。

ところで、CALL がどのような言語能力習得を目的として、どのような授業内容と教授法で行われたかを問うことは、コンピュータテクノロジーだけでなく、外国語教育学や第二言語習得理論の知見をそのより所とする。しかし、現在のところ、朝鮮語 CALL 関連の研究や実践報告は例が少なく、さらに CALL の教育学的理論づけの試みは見当たらない¹⁷⁾。今後の CALL 開発には、教授法、学習システムに関する研究領域と連携して、言語的特性や学習環境の違いに応じた CALL の理論的基礎づけることも必要とされる。

それでは朝鮮語 CALL の現状はどうか、以下においては筆者の一人が担当した立命館大学の朝鮮語 CALL を取り上げて、その実際を検討する。

2. 朝鮮語 CALL の実際

立命館大学において朝鮮語 CALL は、対面授業型の CALL 教室での CALL 授業として、2007 年から始まった。すでに述べたように、当初、朝鮮語教育における CALL 研究の例は乏しく、CALL 教材開発も遅れている状況であった。そのため、CALL 授業の担当者として筆者は、CALL に関する研究理論を検討しつつ、ウェブ上で公開されている大学の CAI 教材などを手掛かりに試行錯誤しながら CALL の教材を作って使用せざるを得なかった。

2. 1. カリキュラムにおける CALL の位置づけ

立命館大学における朝鮮語の授業は、初修コースクラスでは週 4 回（文法 2 時間＋会話 2 時間、会話時間のうち、1 時間が CALL に当てられる）、二言語コースクラスでは週 2 回（文法 1 時間＋会話 1 時間）行われる。CALL は、その対象を初修コースクラスに限定して、週 1 回、対面授業型の CALL 教室で、CALL システムを利用しながら行っている。

さて、朝鮮語 CALL は、「CALL 教室の機能を活用した授業を展開し、朝鮮語のコミュニケーションの能力を高めること」を目標とする。さらには、「日常生活の身近な話題について朝鮮語を聞いたり話したりして、情報や考えなどを理解し、伝える基礎的な能力を養うとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる」ことをその主な指導内容としている。つまり朝鮮語の CALL は、①対面講義で学習した知識の定着をはかる、②CALL 教室の特性を生かしたリスニング力の強化、語彙習得を目指す、③「聞く」「話す」ことに関連した総合的なコミュニケーション能力を養う、④意欲的な学習態度を育てる、ことを授業の目標とする。しかし、実際には朝鮮語 CALL は、対面授業での学習をサポートする補助的な役割をもつものであり、したがって、CALL 教材の開発や教授、学習活動は、対面授業での学習内容を補充し統合させ、より深化させることに重点をおいて行われた。このような位置づけにより、朝鮮語 CALL は他の対面授業との関連で、その到達目標を明確に示し、教材開発および授業活動もそれに沿って行われた。

2. 2. 朝鮮語 CALL の教材

朝鮮語 CALL の教材は、朝鮮語の共通教科書（秋学期：『基礎から学ぶ朝鮮語』、春学期：『使いこなす朝鮮語』、いずれも私家版）の内容を組み込んだものを CALL システムで活用する形を取っている。実際に使った朝鮮語 CALL 教材は次のような内容で構成されている。

- ①「発音」：学習初期段階で利用する。文字をクリックすると、発音を聞くことができる。
- ②「新出単語」：画面上の新出単語のところをクリックすると、・学習課の選択、・新出単語（各課の必須単語の提示）、・練習（文法項目を活用した例文）、・コミュニケーション（基本文型と会話文の提示）という画面が提示される。さらに学習したい課、学習したい内容を選んで学習を進める。それぞれの表示された文には日本語の訳と音声を張り付けてある。
- ③「スキット」：会話文が提示され、音声を聞くことができる。スキットの画面の上段部に「日本語」、「朝鮮語」、「非表示」と提示されるので、どちらかを選んで練習を行う。
- ④「リスニング」：既習の内容から作られた聞き取りの四択問題が各課 10 問ずつ提示される。1 問から 10 問で順番に、問題を聞いて 4 つの選択肢の中から一つを選びクリックする。答えを選んだあとに、質問と答えの文が表示される。赤色付きの○の印と音で正解であることを知らせる。不正解であれば赤色付きの×の印とブーという音が出て、得点が即座に表示される。
- ⑤「練習問題」：画面上の「テスト」ボタンをクリックして単語テストを行う。解答にかかった時間と得点が表示される。これは各課の学習終了後に行うため、時間外でやるとカンニング行為とみなされる。また「練習問題」は学内端末でのみ利用可能である。

2. 3. CALL 授業の実際の流れ

- (1) 朝鮮語 CALL サイトにアクセスしてパスワードを入力すると学習開始の画面が現れる（図 1 参照）。
- (2) あらかじめワードで作成した学習のポイントと例文をセンターモニターに提示しながら説明する。現在使用中の CALL 教材には、学習内容についての解説は取り込まれていないので、教師による説明が必要である。
- (3) 解説が終わると、CALL 教材の目次から学習メニューを選んでクリックし学習を進める。その日の学習する課の新出単語、文法の基本文型と総合練習問題の問いと答え、会話をリスニング（図 2 参照）するように指示する。その際には、必ず各文の右側に付いている日本語の訳を確認しながら「聞く」ように、また、聞きながら「読む」ように指示する。聞き取れなかったところは、自分のペースで、何度でも自由に繰り返して聞くように、また早く終わった人は、次の 3) へ進むようにと言う。
- (4) リスニング問題を解きながら確認させる（図 3 参照）。得点が即座に表示されるので、学習者はその都度、学習結果を把握することができる（図 4 参照）。
- (5) リスニング問題が終わると、学生のパソコンに問題を映して解説を行う。また問題と正解のみ再度音声を聞きながら確認させる。
- (6) 会話の練習問題文を「リスニング」と「シャドウイング」させる。またランダムにペアを組ませて会話の練習を行う。

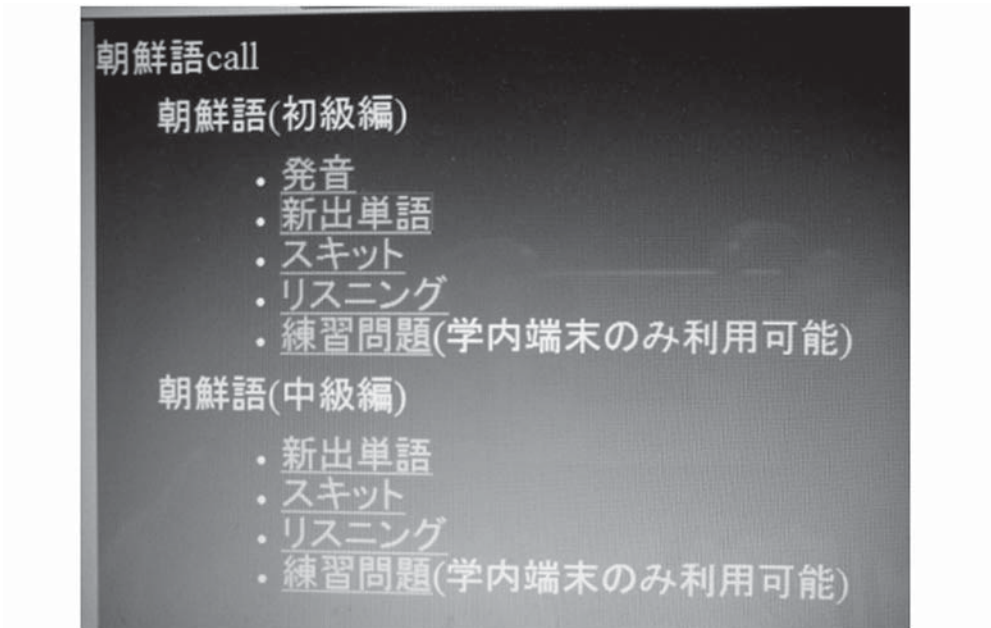


図1 朝鮮語 CALL

저는 학생입니다.	◦	私は学生です。◦
여기는 학교입니다.	◦	ここは学校です。◦
선생님은 한국 사람입니까?	◦	先生は韓国人ですか。◦
이것이 무엇입니까?	◦	これは何ですか。◦
저는 한국 사람이 아닙니다.	◦	私は韓国人ではありません。◦
그 가방은 어머니의 것입니다.	◦	そのカバンは母のものです。◦
안녕하세요?	◦	こんにちは。◦
처음 뵙겠습니다.	◦	はじめまして。◦
저는 다나카 신지라고 합니다.	◦	私は田中しんじといいます。◦
리츠메이칸 대학교 학생이에요.	◦	立命大学の学生です。◦
저는 일본 사람이에요.	◦	私は日本人です。◦
만나서 반갑습니다.	◦	お会いできて嬉しいです。◦
잘 부탁드립니다.	◦	よろしくお願いします。◦

図2 第1課、コミュニケーション

朝鮮語教育における CALL の現状と課題

0 問中 0 正解 0 %(正解率)		
		1 학생입니까?
●		
●		
●		
●		

図3 リスニング問題






1 問中 1 正解 100 %(正解率)		
		1 학생입니까?
●		a. 네, 선생님입니다.
●		b. 아뇨, 회사원입니다.
●		c. 네, 어머니입니다.
●		d. 아뇨, 친구입니다.

図4 解答結果

(7) 単語テストの実施

(8) 他の主な学習活動

上記が授業の基本となるが、その他に、ハングルのタイピング、ペア活動、短文作り、リスニング、シャドウイング、映像鑑賞、外部教材へのアクセスなどの活動を適宜取り入れ、授業の活性化を図った。

2. 4. CALL のメリットと学生の反応

授業の実践から、黒板とチョークベースの従来型授業に比べて CALL は、少なくとも次の点で優れていることが明らかになった。

第一に、文字・画像・音声・動画を連携させたさまざまな情報を取り込んだ授業ができることが上げられる。特に、朝鮮語の場合、文字と発音の指導に多くの時間が費やされるが、パソコンを使った文字の形の認識と発音練習はとても効果的であり、発音の確認も個別にできるため、効率よく進むことができた。

第二に、多様な教材と多様な活動を適宜、切り替えて実施することができる。ややともすれば単調な作業になりがちな授業の流れを、動画や映像、音声資料でダイナミックに変えることによって、学生の動機づけを高める効果があった。また必要な場合は、インターネットに即座にアクセスでき、さまざまな情報を素早く用いることができたので、学生の興味・関心をそのまま反映させながら授業を運営することができた。

第三に、学習レベル、理解度の個人差に対応できる。学習者は自分のペースで練習問題にとりかかり学習を進められるので、無駄な時間がなくなる。また学生が個別に学習することで、教師は問題を抱えている学生のケアにより多く時間を取ることができた。従来型の授業よりも学生一人一人のニーズにより細かく対応することができるだけでなく、担当者の印象からすると、学生はより積極的に質問をし、教師の助けを求めることが多かった。教師と学生間のコミュニケーションがより密になった点では、学生が一人、パソコンを相手に行う機械的な作業といった CALL や CAI の一般的なイメージとは異なっていた。

第四に、短時間でドリルを多く行うだけでなく、何回も復習できるので、言語知識やスキルをより深く理解し習得することができる。特に、リスニングとシャドーイングを繰り返すことで、学生のリスニング力の向上に効果があった。また覚えた表現を実際に使うことへの心理的な壁が低くなったようで、授業後も自分たちで作り変えた表現を使ってみる光景がよくみられた。

第五に、教材での練習問題は瞬時に採点してくれるので、フィードバックを即座に返すことができる。また、学生の出欠管理や学習の記録・分析が容易にできるので大きく時間を節約することができ、自由になった分は教材開発などの時間に回すことができた。

最後に、モニター画面で、学生の学習の様子を確認できるので、問題を抱えている学生や学習に真剣に取り組んでいない学生を的確に把握しケアすることで、授業を円滑に進めることができた。

CALL に対する学習者の反応も概ね、肯定的である。学期の最後に自由記述式のアンケートを実施するが、学生の意見はほぼ次のようにまとめられる。

- ・ 何度も発音の練習ができる。

- ・練習する時間を作ってもらえる。
- ・パソコンを使った授業のほうが、取り組みやすい。
- ・聞いて覚えることは大切だ。
- ・キーボードでハンゲルをタイピングすることができて楽しい。
- ・通常授業で使用されるテキストの内容なので、復習しやすい。

特に最後の意見に関しては、対面授業と CALL との連動という方式が学生にとってよかったのだと考えられる。一方、否定的な意見としては、「キーボードでハンゲルをタイピングするとき、いらいらする」ということくらいで、CALL の意義を否定するものではなく、学生も対面授業とは異なった授業として楽しんでいる様子が見えてくる。

以上、これまでの CALL の授業実践ではさまざまな CALL の有効性およびその可能性を確認することができた。前述した CALL の効果、すなわち、学習の効率性や学習の効果、情報へのアクセス、便利さ、学習者の動機づけといった側面からして、正確な統計を取ったわけではないにしても、概ね効果的であったと言える。特に、学習者の多様化、学習形態の多様化という語学教室を取り巻く環境の変化を勘案すれば、CALL はそれに対応する有効な方法であることは議論の余地がない。情報端末の操作に慣れている学生にとってみれば、教師による一方通行の講義型の授業は物足りず、自分で操作しながら学び取るという CALL は刺激的であろう。今後も研究と実践を重ねて、より有効な CALL の導入と積極的な運用を試みていかねばならないと思う。一方、問題点としては、教材の準備時間が足りないこと、そして学生のニーズや興味・関心の調査・分析に基づいた教材開発や授業活動の構想ができないことなどが上げられる。これらについては後述する。

3. 朝鮮語 CALL の課題と可能性

3. 1. CALL 実践における問題点

以上、朝鮮語 CALL の実際を簡単に紹介し、そのメリットと学生の反応を報告したが、それでは朝鮮語 CALL の問題点は何か。まず授業実践から見えてきた問題点をいくつか指摘しておく。

これはおそらく朝鮮語 CALL に限らず、コンピュータを利用した授業に共通した言えることであろう。

第一に、教師の技術的な知識不足からくる時間のロスがあげられる。CALL 教室の機能は多岐にわたるが、パソコンの調子が悪くなって音声が止まったり、映像が映らなかったりなど、突発的なトラブルが多い。トラブルが起きるたびに、授業は中断され、機械の修復にかかるか、支援を求めたりしなければならぬが、そうしているうちに学生は退屈し、授業の流れも途切れてしまう。CALL の効率的な運営のために教師は、マシン・トラブル発生時などの対処法など、機械を熟知していることが求められるが、それができない場合は、サポートしてくれるスタッフの常駐が必要である。

第二に、共同・協同学習に配慮した教授法の工夫が必要である。CALL では、学生は個別的に、自分のペースに合わせてコンピュータを使って学習を進めていく。そもそもこの点は、学習者の

多様なニーズへの対応として、また能力の差に応じた個別化の有効な方法として CALL が高く評価される所以でもある。しかし、学習の効率性を第一義にすることは、学習者間の人間的関係性を犠牲にする側面を持つことも事実である。ただし、教師と学生間、また学生同志の関係性の希薄化は、CALL の学習活動のデザイン次第である程度は解決できると考えられる。先にも触れたように、実際の授業経験からすれば、CALL では教師と学生とのコミュニケーションが増えるように思われる。学生が個別に作業する間、教師は机間巡視をするので、学生は教師と個人的なコミュニケーションをとったり、学習について質問をしたりしやすくなる。その他、学習者同志の結び付きに関しても、学習形態を工夫して協同・共同作業を組み込み、学習者間の交流を図ることもできる。つまり、できるだけ学生同士で読み合いをさせたり、ランダムペアで会話をさせたりするなど、教師对学生、学生对学生でのコミュニケーションを意図的に取り入れて、学習形態のバランスのとれた運用に心懸ける必要がある。

第三に、CALL に対する学習者の個人差への適切な対応が求められる。学習の成果に影響する学習者要因としては、適性、学習スタイル、言語学習ストラテジー、動機、態度、ストレスマネジメントなど、さまざまなものが取り上げられる。すでに多くの研究により、目標言語や文化に対する学習者の態度が言語習得に大きく影響することが明らかになっているが、コンピュータの使用に対する学習者の態度などの心的要因が CALL の学習効果に影響を及ぼすことは十分に予想できる。教科書と黒板を主な媒体とする対面授業とは違って、CALL では学生はコンピュータを使いながら自ら学習を進めていくことが求められる。そのために、コンピュータを使いこなす技能やコンピュータ利用に対する気持ちなどの個人差要因は、当然、CALL への態度、そして CALL の有効性に大きく影響を及ぼすことが考えられる。学習者が持っているコンピュータ不安が、言語知識の習得に向けられるべき認知能力の働きをコンピュータの使用方に集中させてしまい、結果として、知識の習得が妨げられることは十分に考えられる¹⁸⁾。

もしコンピュータ使用に対する学習者の態度や心的要因が学習成果と関連しているのであれば、CALL ではまず、そうした学習者の態度や不安感を解消することから始めなければならない。実際、最初の授業では、CALL 教室のメリットや使い方を説明し、積極的に活用して学習に役立てるように注意を促すのだが、そういうガイダンス的な一回限りのものではなく、もっと時間をかけて指導を行う必要があるとも考えられる。特に、パソコン操作に慣れていない学生や苦手にしてしている学生に対してはその不安を取り除くよう、教師は細心の注意を払って授業を行う必要がある。

3. 2. 朝鮮語 CALL の今後に向けて

それでは今後の朝鮮語 CALL のあり方を考える上で考慮すべきことは何か。CALL 授業の実践から見えてきた課題として次の四点を取り上げることができる。

まず、現在、朝鮮語 CALL はドリル型 CAI を中心に適宜、マルチメディア、インターネット、パートナーとの対話練習など、さまざまな方法を組み合わせて行っている。しかし欧米で進んでいるマルチメディアとしての CALL からすれば、これはその初期段階に留まっていると言わざるを得ない。すなわち、朝鮮語 CALL は、学習者が一人で端末に向き合って行うドリル型学習に重点が置かれている「日本型 CALL」である。

これに関連しては日本的な CALL の特徴の他に、朝鮮語 CALL でプロジェクト学習型や自主

発見型学習など、マルチメディアの特性を使う CALL の活動形態の導入が難しい理由は学習者の言語能力のレベルである。実はこれがもっと大きな障碍になっている。つまり、第一外国語として小学校から学び始める英語とは違って、初修外国語としての朝鮮語の場合、限られた時間内に高度な言語力を駆使して、マルチメディアとしてコンピュータを使いこなす学習の構想は、極めて困難である。こうした制限を自覚しつつ、最大限にその良さやメリットを活かすことのできる CALL の在り方を模索することが今後の朝鮮語 CALL にとって重要な課題となっている。

第二に、既に述べたように、対面授業の補助的役割を担わされることで、CALL に独自の教授、学習形態が限られてしまう。学生側からは、対面授業での学習内容を復習できるという点で評価する意見も聞かれるが、一方、補助的な授業構成では言語能力を実際に様々な状況で実践し、運用する力を育むことが困難になってしまう。この点に関しては、CALL の活動形態を対面授業での学習内容とは別個のものとして組み立てるのか、それともこれまで通りに連動した形で CALL のメリットを活かすのか、CALL の朝鮮語教育のカリキュラム上の位置づけについても検討する必要があるだろう。

第三に、現在使用中の教材は、CALL スタッフ（大学院生）の技術的支援を受けながら筆者が作成したものである。そのため学習形態は基本的な操作によるものが多く、学習者にとってバラエティに富んでいて、興味をそそられるようなものとは程遠い。立命館大学の CALL の特性に合った教材と学習活動の開発が急がれる。それに加えて近年のインターネットの普及やマルチメディアの導入により、朝鮮語学習の環境や方式もますます多様化が進んでいる。CALL は個別学習に適しているが、そのためには個々人のニーズ、能力、興味・関心、学習スタイルに合った学習環境を提供しなければならない。そのような学習環境の構築には、言うまでもなく、個人差要因に合わせた多様な教材と活動を用意することが理想である。それを考えると、現在の CALL の教材は、学習者の個人差に合わせて学習内容、形態を個別化するまでには開発が進んでいない。また、ドリルがたくさんできるというメリットも、学習者の反応の仕方が限られているため、学習が単調 (drill and kill) になる問題も指摘できる。そのため、朝鮮語教育の目的や学生のニーズ、学習目標に合わせた CALL 教材の開発が至急、必要であるが、現状では、朝鮮語 CALL に適した教材を開発するだけの人的、技術的な環境が決定的に不足している。今後、CALL の特性を生かした多様な学習のメニューを提供していくためには、技術的な面でのサポートの他に、学校の枠を超えた教師間の協力体制を整うことも必要と思われる。

第四に、学習者の自律を高めるよう工夫をしなければならない。CALL は学習の個別化をもたらし、学習者の自律がいつそう促進されると考えられているが、現実はそのよう簡単ではない。望月・片桐によれば、自学自習用の教材やコンピュータ・ソフトを提供しても、大部分の学生は積極的かつ継続的に自学自習を行うことが少ない¹⁹⁾。つまり、単位認定や成績などの形で教員が何らかの関わり合いを持たないと、あまり自習学習の効果は期待できないのである。授業の経験からすれば、学習動機の高い学習者は、自分が何をすべきかを認識しており、自ら主体的に学習を進めていくことで、学習の効率も高まるのである。その反面、動機づけが低く、自律した学習態度を身につけていない学習者の場合は、居眠りする、雑談する、授業とは無関係なネットサーフィンをやるなど、さまざまな問題行動がみられる。この問題に対してより根本的な解決策が求められる。つまり、学習動機を高め、積極的かつ主体的に授業に取り組んでもらうための何

らかの方法が求められるが、その一つに最近、学習方法の指導をも組み込んだ CALL に関する研究が散見される²⁰⁾。もし学生の自己学習のストラテジーを確立させることが自律した学習へとつながるのであれば、CALL の有効な活用にとって重要な手掛かりが得られる²¹⁾。

4. おわりに

以上、朝鮮語 CALL の現状と課題を取り上げながら、今後の朝鮮語 CALL のためのいくつかを検討すべき点を指摘した。それでは最後に、そもそも大学における朝鮮語 CALL は必要かという問題に戻ってみよう。

CALL は朝鮮語教育にとって多くの可能性をもった教授・学習のツールであることは言うまでもない。そもそも大学における朝鮮語教育に関しては、学習時間数が足りないこと、学習者の動機付けが低いこと、到達目標レベルが低いことなど、初修外国語教育に共通する問題がしばしば指摘される。こうした状況を考えると、CALL はその運用の如何によっては学習者の実質的な学習時間を増加させる手段として、朝鮮語教育の抱える問題解決への手掛かりとなりうる。もちろん CALL の意義がこうしたカリキュラム上の問題をクリアすることにあるわけではないけれども。現実には、いくつかの大学における自律型 CALL による英語教育の充実化は、英語と初修外国語という違いを割り引いても、その先例として注目に値する。その他に、CALL では多様な学習教材や活動を提供することが可能であり、それによって学習への動機を高めて対面授業にまでその波及効果を期待することもできる。また CALL で習得した自主的な学習態度により、学習目的や目標の多様化が進み、結果として朝鮮語学習を意義づける契機ともなる。

しかし、CALL さえ実施すれば、全ての問題が解決できるというわけでもない。大学における朝鮮語教育の現場では、今なおドリル中心の CAI 型が主流であり、コンピュータの使い方や機能に関する研究や実践報告では、それが言語能力の習得にとってどのように役立つかに関しては経験原則的に主張されるにすぎないものも多い。もともと朝鮮語 CALL の研究は始まったばかりで、どのようなメディアを、どのような方法で使えば、どのような学習効果が得られるかという問題についてはこれからさらに研究が進められるべきである。

最後に、2002 年のワールドカップサッカー試合の共同開催以降、近年の韓流ブームに至るまでの一連の韓国・文化に対する関心の高まりは、大学における朝鮮語学習者の増加にも表れている。学習者の量的な増加は、学習者のニーズや学習目的の多様化に伴った学習の質的変容を要求するものでもある。朝鮮語教育を取り巻くこうした変化を考慮すれば、当然、朝鮮語 CALL の内容や活動形態もこれまで以上に多様化を図っていかなければならない。とすれば、今後の朝鮮語 CALL においては、理論的かつ実証的にその有効性や適切性が検証される CALL 方法論の確立と、学習者の興味・関心を反映した学習コンテンツの多様化が緊急の課題であると考えられる。引き続き、外国語教育の教授、学習システムという大きいコンテクストの中で、コンピュータテクノロジーの特性を活かした朝鮮語 CALL の可能性について研究を続けていきたい。

注・参考文献

- 1) CALL が導入された当初、コンピュータは、語学教育における究極のメディアとして見なされた。しかし実際にはその普及は遅れていて、その一因としてしばしばコンピュータテクノロジーの導入に対して無関心であったり拒否したりする他に、自らの教授法を変えたがらない教師の心理的要因が取り上げられる。
- 2) 吉田光演「これからの CALL の問題点と展望」『広島外国語教育研究』1、1998 年、77-86 頁。
- 3) Warschauer, M. and Healey, D., "Computers and language learning: an overview", *Language Teaching* 31, 1998, pp.57-71.
- 4) Hubbard, P. and Siskin, C. B., "Another look at tutorial CALL", *ReCALL*, 16 (2), 2004, pp.448-461.
- 5) Levy, M., *CALL: Context and Conceptualization*. Oxford: Oxford University Press, 1997, p.1.
- 6) Egbert, J. L., "Conducting research on CALL", In Egbert, J. L., and Petrie, G. M. (Eds.), *CALL Research Perspectives*, Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum, 2005, p.4.
- 7) Egbert, J. L. and Petrie, G. M. (Eds.), *CALL Research Perspectives*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum, 2005, p. 5.
- 8) 岩崎克巳「日本人の自律という観点からみた CALL—日本型の CALL の持つ一面性からの脱却を目指して」、外国語メディア学会 第 46 回全国研究大会、2006 年。
<http://home.hiroshima-u.ac.jp/katsuiwa/papers/>
- 9) 吉田光演「これからの CALL の問題点と展望」『広島外国語教育研究』1、1998 年、80 頁。
- 10) Zimmerman によれば、自己調整学習とは、学習者がメタ認知の面で、動機づけの面で、行動の面で、自らの学習プロセスに積極的に関与している学習として定義される。学習者を学習に向かわせる動機づけや自己調整能力、また自己効用感などの解明は、CALL における学習者の動機づけや自律にとっても有効な示唆を与えてくれると思われる。[Zimmerman, B. J., Bonner, S. and Kovach, R., *Developing Self-regulated Learners: Beyond Achievement to Self-Efficacy*, American Psychological Association, Washington DC, 1996. [ジンマーマン .B.J. 他著、塚野州一、牧野美智子訳『自己調整学習の指導』北大路書房、2008 年]
- 11) Beatty, K., *Teaching and researching computer-assisted language learning*. New York: Longman, 2003, p.7.
- 12) Kern, R., "Perspectives on Technology in Learning and Teaching Languages", *TESOL QUARTERLY* Vol. 40, 2006, p.183.
- 13) 境一三「CALL と TBL (Task Based Learning) / 教員養成における CALL の扱い」『外国語教育研究 7』外国語教育学会編、2004 年、105-131 頁。
- 14) Garrett, N., "Technology in the service of language learning: trends and issues", *Modern Language Journal* 75, 1991, pp.74-101.
- 15) 竹蓋幸生「外国語教育システムの中の CALL 教材の高度化：その研究プロセス英語 CALL 教材の高度化を中心に」『特定領域研究 (A) 高等教育改革に資するマルチメディアの高度利用に関する研究ニューズレター』第 2 号、2001 年、13-17 頁。
- 16) 2007 年度、立命館大学の教員と学生を対象に筆者の一人の梁が行った朝鮮語教育、学習に関する意識調査（未発表）によると、韓国語の教育目的に関する理解は次のようである。教師の場合は、韓国の文化や社会に触れ、それを理解する（80.9%）、言語一般に対するセンスを高める（42.9%）、韓国・朝鮮人とのコミュニケーション能力をつける（47.6%）が上位を占めている。一方、学生の場合は、韓国・朝鮮人とのコミュニケーション能力をつける（52.8%）、教養を高め、人間的な視野を広げる（50.8%）、韓国の文化や社会に触れ、それを理解する能力を養成する（38.2%）という順になっている。教師は、朝鮮語教育、学習を異文化理解の一つとして捉える傾向が強いが、学生の方は、コミュニケーション能力の習得として捉えている点で、大きな違いを示している。
- 17) 朝鮮語 CAI や CALL に関する研究に関連したものは次のようなものがある。
香山聡子「朝鮮語 CALL の研究」『中国学誌』謙号、2000 年、1-20 頁。

油谷幸利「朝鮮語 CAI の研究」『朝鮮学報』第 153 輯、1994 年、19-36 頁。

平香織「韓国語 CALL 教材に関する報告」『沖縄国際大学総合学術研究紀要』11 (1)、2007 年、17-28 頁。
他に、朝鮮語教育研究会による朝鮮語 CALL 教材作成のための講習会活動がある。

18) 劉百齡「CALL 利用学習に対する態度・動機づけの要因の分析」『言語と文化』第 3 号、2003 年、201-214 頁。

19) 望月正道、片桐一彦「ネットアカデミー利用実態報告：平成 14 年 9 月—平成 15 年 1 月」『麗澤大学紀要』76、2003 年、175-185 頁。

20) 元木芳子「第二言語学習と学習ストラテジー」『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』No.7、2006 年、689-700 頁。

21) Oxford によれば、優れた学習者とは、どのようなストラテジーを何のために使用するかを意識しており、言語タスクに適したストラテジーを選択することができることとされる。

[Oxford, R. L., *Language Learning Strategies: What every teacher should know*, MA: Newbury House, 1990.]

CALL Practice and Critical Issues in Korean Language Teaching Environments

KNOW Jae-Ok (Lecturer, Language Education Center, Ritsumeikan University)

YANG Jeong-Mo (Associate Professor, Kobe Shinwa Women's University)

Abstract

This paper addresses what CALL can contribute to Korean language learning, focusing on the pedagogical questions in using computers in the classroom. Section 1 examines what CALL is all about, giving a brief overview of its different types of programs and pedagogical benefits. Section 2 provides a description of CALL practice carried by KNOW. Finally, section 3 examines some assertions as to what cause problems in facilitating CALL system and suggests ideas for further research and design of good CALL in Korean language learning environments. In conclusion, it claims that to construct a highly motivating Korean CALL environment is needed and the concepts of individualization, and other related theoretical frameworks should be discussed to enhance the motivation and achievement of learner in CALL.

Key word

Korean language, CALL, Affective factors, Learning style, Motivation, Autonomy, Learner variables, Individualization of learning process.

